

ひ
ら
た
い
地
面

作
山
田
め
い

【登場人物】

松田ひろむす……………十年前に行方不明になった、松田家の主人。

松田浩子……………ひろむすの妻。「こべる」のメンバー

谷田部誠……………「こべる」のメンバー

野村祐一……………「こべる」のメンバー

金升高雄……………「こべる」のメンバー

鈴木勝……………「こべる」のメンバー

中居慎太郎……………鯖江町の循環器系医師。

吉見包……………鈴木の恋人。中居循環器科の看護師。

キャプテンマイヤー……………「マイフラヤー号」の船長

ジョンソル……………「マイフラヤー号」の船員

作業員 1

作業員 2

作業員 3

作業員 4

作業員 5

作業員 6

【あらすじ】

人口1万人以下の小さな町・鯖江町では、そこに暮らすほとんどの住民が鯖の加工業に従事している。「こべる」は加工業の中でも押すことを労働の主としている団体である。

「こべる」のメンバー 松田浩子の夫ひろむすは、十年前、地動説を常識としている鯖江町で、天動説を唱えて街から追放されてしまう。

十年の失踪を経て、突如再び街に戻って来たひろむすは追放された過去が記憶にないと言う。地球が永遠の平地であると信じてやまなかったひろむすの浩子や同僚は戸惑いを覚えるが……………。

幕

〔0〕帰ってきた、ひろむす

早朝、鯖江町にある松田家の玄関先。

海に面しているこの家の空気は塩っぱく、波の音、海鳥が注意し合う声が聞こえる。

人口1万人を下回る小さな町の住民のほとんどは、鯖の加工産業に従事している。街の中に掲げられている看板などで、観客はそのことを知る。

木造2階建てのこの家には、松田浩子が一人で暮らしている。

玄関先には、浩子が育てているプチトマトの植木が複数並べられている。

一人の男が松田家の前を歩き横切る。

男は苗木にたくさん実っているプチトマトと目が合う。

しばらく男はプチトマトと見つめあっているが、

ややあって、プチトマトを一つちぎって食べる。

一つ口に入れてしまうと、一つずつ躊躇がなくなっていくのだから、男は、プチトマトを一つ、二つ、と口に入れて食べ始める。

玄関を開けて、パジャマ姿の浩子が出てくる。

毎朝彼女は新聞屋が家に新聞を届ける前にポストをチェックしなくては気が済まないのである。

プチトマトを一心不乱に食べている男は彼女に気がつかない。

浩子 (男が庭先にいることに気がつく) !

浩子は声が出ないが、驚いて足元にあるジョウロに蹴つまずく。ブリキでできていたジョウロは音を立てる。

男は浩子に気がつく。

見つめあう二人。

浩子 ……

男 ……

浩子 あの、

男 ……すみません、

男、後ずさりして帰ろうとする。

浩子 ……

男 ……

浩子 ひろむす？

男 あ……。

見つめ合う二人。

時刻はちょうど朝五時になっていた。

「1」プチトマトが地面に落ちる。

一週間後。

松田家のリビング。

床や壁は木でできている。

浩子の職場の同僚・谷田部と野村がダイニングテーブルに着いて
コーヒーを飲んでいる。

朝日が差している。祝日・午前九時。

日が差している窓辺にはやはりプチトマトの苗木が置かれてい
る。

谷田部 ギャップですよねえ。

野村 (コーヒーを吹いて冷ましている)

谷田部 松田さんの家ってもっと昔の家なのかと思ってました。

野村 え？古いでしょ、この家。

谷田部 そうじゃなくて、

野村 便所も水洗じゃないんだよ？まあ、この辺りは大体そうだ
けど。

谷田部 和風とか洋風とかそういう話がしたいんですけど、

野村 ……まあ、変わったね。

谷田部 でしょ？外見は和風の造りで、古いんですけど、中はカ
ントリー調というか、ギャップが…

野村 (コーヒーを吹いて冷ましている) 松田。

谷田部 は。

野村 よくよく考えればそうなんだよなあ。だって、あいつはも
っとなんというか、ダラダラしたところのある女だった。

谷田部 なんの話ですか？

野村 家に来て、コーヒーなんか出す、女じゃなかったんだよ。ス
ティックの砂糖とか、スティックのクリップをコーヒーに添え
るタイプの女じゃなかったんですね。不思議ですねえ。

谷田部 敬語やめてくださいよ。気持ちが悪い。

浩子がリビングに入ってくる。

お盆に四人分のババロアが入ったガラスの器を乗せている。

浩子 お待たせしました。

野村 (谷田部に) ほらね。

谷田部 え。

浩子 (ババロアをテーブルの上に並べながら) なに？

野村 別に、松田の家がカントリーで洒落てるって、谷田部くん
が褒めるから。

浩子 あ、そう？あんまり気に入ってないんだけど、別に家の中とか。

野村 朝から、こんなの食えないよ。

浩子 じゃあいいよ、別に、無理に食べてくれなくても。

谷田部 いや、いいですよ、いいじゃないですか！いいなあ、ぼく食べますよ。松田さん。

浩子 ほら、若者は素直でしょ？先週作り置きした手作りなのよ。

谷田部 へえ！

野村 (谷田部に) ほらな。

浩子 あんた、さっきから何？

野村 お前こそさっきからなんだ。

浩子 私はいつも通りですけど？

野村 なんかないから、家まで呼んだんだろ？もったいつけるな。

浩子 ……

谷田部 今月末の準備なら、順調ですよ。仕事の方もフォローできてるし、先週から工場休んでることなら、全然、みんな気にしてませんよ。

野村 俺は気になってる。

谷田部 気にしてませんよ、野村さんも。ね。

浩子 あの……

浩子、言い淀んで黙ってしまおう。

谷田部、ババロアを嚙って食べる。

谷田部 (口にババロアを入れながら) まあ、いいじゃないですか、か、言いにくいこともあるんです、女性には……僕は分かります。

野村 ……

浩子 ……

谷田部 ……

野村 女性ってのは、いわば月ですから……

野村 お前、ちょっと黙ってるよ。お前が、

隣の部屋から音がして、扉を開けてひろむすが入ってくる。

浩子 あ！

ひろむす (浩子へ) ああ、ごめん。

浩子 だめ、だめ、

ひろむす だって、わからないんだよ……気になっちゃって。

浩子 ……ああ、もう、

野村 ……お前

谷田部 え……

野村、谷田部、その場で立ち上がる。

野村 ……

谷田部 ……

浩子 ……ああ、もう。

ひろむす え？

浩子 めちゃくちゃになっちゃったじゃない。

ひろむす ああ、ごめん。

浩子 野村さんと谷田部くんよ。

ひろむす ああ……………

谷田部 ……………

野村 おい……………、お前、ひろむすか。

ひろむす ああ、そうだ。

野村 こいつは……………

浩子 ごめんなさい、仕事を休んでたのはこういうわけだったの。

ひろむす ああ、ああ、すみません。

野村 しかし、驚いた……………本当に、ひろむすか。

浩子 あなた、ちよつと自分の部屋に戻っていてくれる？

野村 いや、ここにいろ。

浩子 でも……………

ひろむす 気になるんだ。

野村 なあ、待て、これは今ここにいる奴だけの秘密だ。

谷田部 野村さん……………

野村 おい、カーテンを閉めろ。

浩子 ……………

野村 おい、谷田部。

谷田部 僕ですか。

野村 お前しかいないだろ。

谷田部 でも……………

野村 早く。

谷田部、カーテンを閉めようと窓に近づく。

ひろむす、テーブルの上に置かれていたババロアの器を一つ取り、ソファに座って啜る。

野村 え。

谷田部 え。

ひろむす (ババロアを食べながら) 気になっちゃって。

浩子 あなた、

ひろむす いやあ、甘い。ムリムリして美味しいよ。

浩子 あなた、やっぱり部屋に戻っていて。

ひろむす お話中にすみません。どうしても気になって。えーと……………お名前が、

浩子 こっちが野村さんで、この人が谷田部くん。

ひろむす ははあ、そうでしたか。それはすみませんでした。

野村 おい、松田、どういふことだ。

谷田部 これは……………

浩子 私にだってわからないの！でも、急に帰って来たのよ……………

…

野村 いや、しかし、ひとまずカーテンは閉めろ。

浩子 いいよ、別に閉めなくて。

野村 わからないじゃないか。

浩子 何よ、それ。わからないって何。

野村 おい、谷田部。

谷田部 僕ですか？

ひろむす カーテンを閉めると暗いんです。

谷田部 え……………

ひろむす だって、この部屋に光が入る窓と言えばあそこだけで
すからね。

窓の側に置かれていたプチトマトの苗から、小さな熟れたプチ
マトがコロコロと落ちる。

谷田部 あ。

野村 ……………なあ、ひろむす。

浩子 ちよっと、

ひろむす なんですか？

野村 聞きたいんだが、今、トマトが苗から落ちた。

ひろむす ええ、落ちました。

浩子 ちよっと、やめてよ。

谷田部 野村さん？

野村 トマトはどうして落ちるのかな？

ひろむす トマトがなぜ落ちるのか？変な質問だね。

野村 知りたいんだ。

浩子 いい加減にして。

ひろむす (笑って) そんなの当たり前じゃないか。

浩子 ……………！

野村 ……………

谷田部 ……………

ひろむす それは、……………万有引力のおかげだよ。地球は回って

いるけど、地球には引力があるからね。当たり前じゃないか。

野村 ……………そうだ、うん、そうなんだよ。はは……………ははは、当
たり前だよなあ。

野村、大きな声で笑い出す。ひろむすも笑っている。

窓からはまだ朝日が差し込んで、

床に落ちたプチトマトを照らしている。

「2」月末の準備をする「こべる」の画面

鯖江町の中心に位置する鯖工場の組合「こべる」のメンバーが集
まる日曜日の昼。

「こべる」では年に一度の準備が月末に迫っているため、休日も
出勤をしている。

地下の作業場の中央には、巨大なドラム缶のような機械物が設置
されている。中身は丸りとくり抜かれている。

谷田部と金升と鈴木が三人で、横向きに置かれた機械物を押す

谷田部 はい、セーの。
金升・鈴木 セーの。

機械物は重くて動かない。

機械物を押し続けながら、三人は話をしている。

三人 (押し続けている)

谷田部 ちょっと、一回……押すのやめよ。

金升 はい。

鈴木 え、なんスカ、めっさ重ないですか？

金升 なあ。

鈴木 はあ、さっきから全然動かんです。

谷田部 さ、もう一回やりますか。

鈴木 いや、別の方法を考えましょう。

谷田部 いやいや、時間かかっちゃうから。

鈴木 めっさ頭悪いですよ。普通に押すとか。

谷田部 考えすぎて何もしなかったら意味ないじゃない。

鈴木 いや、谷田部さんのそういう頭悪いところがどうなんだっ

て僕は言ってるんで。

谷田部 え？

鈴木 だからね、ただ闇雲に押すだけって頭悪くないですかって

ことなんですけど。

谷田部 待て、俺のこと言っただろ。俺が頭が悪いって。

鈴木 言ってますよ。(金升到)なあ。

金升 はい。

谷田部 いいよ、もうやってくれなくて、向き変えるのは、俺一人でやるから。

鈴木 だから、そういうところ、谷田部さんの頭悪いところだと
思うんですよ。

谷田部 おい、なんだよ。

金升 まあまあ、

谷田部 俺が頭悪いってなんだよ。

金升 だから、そういうところですよ。

谷田部 は。

吉見が、作業場に入ってくる。

吉見 すみませーん。

谷田部 あ、丸ちゃん。

吉見 あれ、すみません、まだ休憩時間じゃなかったんですか。

谷田部 ダメだよ。まだ全然作業中ですから。

吉見 もうお昼ですよ。

谷田部 ごめんね、ここ「こべる」の人だけだから。なあ、鈴木。

鈴木、帰る支度を始めている。

いつの間にか、機械物を押ししているのは、谷田部と金升だけになっていた。

谷田部 おい、

鈴木 お昼までつてことだったんで、帰ります。

谷田部 ダメだよ、まだ動いてないんだから。

金升 どのみち今いるメンバーでは無理ですね。

谷田部 お前も止めろよ。

吉見 え、いいよ、私待ってるよ。

鈴木 ごめんごめん、いいよ、飯行こうよ。

吉見 いいの？

谷田部 いやいや、あと少しだから、

鈴木 いいじゃないですか、たまのデートくらい、行かせてください。

さい。

谷田部 デートくらいいつでも行けるよ。

鈴木 え？谷田部さんはいつでも行けるんですか？

谷田部 行けるよ！

吉見 確かに、今日はメンバーの人少ないですよ。野村さんと

か松田さんとか、

金升 今日いないんですよ、非力なメンバーしか残ってないし……

……。野村さんは知らないけど、松田さんも体調悪くて仕事もこの一週間休んでましたしね。

吉見 あれ、浩子ちゃん休んでたの。

鈴木 というわけで、僕はもう行きます。谷田部さんも金升も今日はもう解散で、

吉見 鈴木くん、今日サンダルじゃない。

鈴木 そうだよ。

吉見 ダメだよ、お店入れてもらえないよ？

鈴木 バカだな、入れてもらえるよ、あんなとこ、裸で行っても入れてくれるよ。

吉見 入れてくれないよ。

金升 (谷田部に) 僕も帰っていいですか？今日はもう進まないですよ。

谷田部 お前まで………(鈴木へ)おい、デートに配送のトラック

使うなよ。

鈴木 分かってますよ、あれは仕事用ですから。

作業場に野村が入ってくる。

野村 おう。

鈴木 あ、野村さん、おはます。

金升 おつかれさまです。

谷田部 ……

野村 (鈴木に) 何？帰るところなの？

鈴木 すんません、ちょっと所用で。

谷田部 野村さん、あいつ、サボる気ですよ。

金升 このメンバーじゃ全くできなくて。

野村 大丈夫。松田も復帰するし。来週から進むだろ。

金升 お、松田さん出てこられるんですね。

野村 松田もだけど、ひろむすも帰ってくるんだ。

鈴木 ……え？ひろむすさんって、あの。

野村 訳はわからんが、昨日松田の家に行つて、確かめたんだ、急に帰ってきたんだ。

鈴木 そんな……え、「こぺる」に戻ってくるんですか？

野村 そう。

鈴木 ダメですよ！

谷田部 ……

鈴木 谷田部さんもなんとか言つてくださいよ。

谷田部 俺も、松田さんの家と一緒に رفتんだ。

鈴木 それなら、

谷田部 覚えがないみたいなんだ。

鈴木 え？

野村 ああ、俺たちのことも忘れてるみたいだった。覚えてるのは、この鯖工場で働いていたことと、自分の家、妻のことくらいで。もちろん「こぺる」のことなんか話に少しも出てこなかった。

鈴木 ……にわかには信じがたいですよ、

吉見 私、部屋から出てみましょうか。

野村 いや大丈夫だよ。

金升 あの、ここで働いていた人のことですか？

谷田部 松田さんの旦那さんだよ。

金升 え、松田さんってご結婚されてたんですか。

谷田部 そうだよ。で、ひろむすつてのが旦那で、けど……十年前に失踪して、

金升 ふうん、旦那さんは、その、どうして失踪なんか。

谷田部 まあ、色々あるんだよ。

鈴木 「それでも地球は止まっている」

金升 え。

谷田部 おい、

鈴木 失踪する最後に「こぺる」でひろむすさんが言つたんだよ。

「それでも地球は止まっている」って。

金升 そんなまさか……

鈴木 当然、そんなことを言つてりゃそうなるさ。失踪したということにしてるけど、迫害されて、奥さん一人残して自分を出て

行つたんですよ。身勝手だと思いませんか。

野村 まあ、そう言うな。本当にそのことがすっかり抜け落ちてるんだ、

鈴木 信じられませんよ。

谷田部 おい、俺も会つたんだ。間違いない。人の記憶って奴は、思っているよりも簡単にできていく。とてもシンプルなさ。強くて忘れたい記憶から抜け忘れるようにできているのさ。

鈴木 僕だって、ひろむすさんのことは忘れられません。「それで

も地球は止まっている」と言い放ったときの、血走った目を、みんな覚えていてでしょう？

谷田部 ……………

野村 まあ、そう焦るな。

鈴木 でも……………

野村 俺も奴の口から「万有引力」が出てくるまでは半信半疑だったさ。

鈴木 そんな、「万有引力」なんて。

谷田部 俺も耳を疑ったよ。奴があんなに軽蔑した言葉だ。しかも笑いながら、「そんな当たり前のこと言うなよ」って感じで。

野村 そういうこった。どのみち人手不足には変わりないんだから、手伝ってもらおうじゃない。松田夫妻に……………さあ、もう休日出勤はやめにしよう、丸ちゃん、これから鈴木とデートなんだろう？

吉見 そうですよ。

谷田部 いいなあ。

機械物の外壁の一部が音を立てて落ちる。

金升 あ！

谷田部 嘘だろー、もう。

鈴木 谷田部さんが力任せで押すから……………頭悪いな。

谷田部 うるさいな。お前が触ったところが落ちたんだよ。

野村 引力に勝てなかったんだろーなあ……………どれ、俺もやってみようかな。

金升 お願いします。

谷田部と金升到野村が三人で機械物を押し始める。崩れた外壁に出来た穴から昼の日差しが抜けて地面に光を落とす。剥がれた外壁と反対側の外壁もわずかに、剥がれて落ちる。

機械物を押している三人の向こう側では、作業員が別の作業を始めている。

「作業 みる・振る」

作業員1、作業員2が並んで作業をしている。

作業員2は防護マスクにゴム手袋をしているが、作業員1はマスクを顎に引っ掛けて、ゴム手袋もしていない。

作業員1が腰かけている丸椅子の側には小さな口の昇降機があり、昇降機の口が開くとそこには両手で持てるほどの大きさの機械物が出てくる。その機械物は、まるでオーバーパーツのように、一見シンプルだが、何に使用するのか分からない形状をしている。昇降機はゴウンゴウンと音を立てている。

作業員1 (機械物を手にして、検品をするかのように手の中で

くるくると器用に回している。)

作業員1は微笑みを浮かべながら作業をしている。

作業員1は作業員2に機械物を手渡す。

作業員2は、手渡された機械物を上下に振る。ちょうど麵の湯切りをするかのような全身運動をしている。

作業員2が機械物を上下に振っている間に、昇降機からは次の機械物が出てきて、作業員1は先ほどと全く同じように、くるくると機械物を手で回して確認し、作業員2に手渡す。

作業員1、作業員2の動きは熟練された職人のように無駄がなく美しい。二人は話をしながらも、全くぶれることなく作業を続けている。

作業員2 マスクしないの？

作業員1 ………

作業員2 そろそろ誰か管理しにくるかもしれないし。

作業員1 ………

作業員2 ね。

作業員1 ………

作業員2 だから、マスク、書いてあるでしょ。

作業場の入口らしきところには、張り紙がしてあり、「薬品を混ぜた有毒な塗料あり、マスクなしの入室を禁止する」と書かれてい

る。

作業員2 ………ねえ、あなただから話すんですけどね。

作業員1 ………

作業員2 ここは鯖工場でしょう？

作業員1 ………

作業員2 ねえ、これは工場から出荷される鯖缶のどの部分なんですかね？

作業員1 ………

作業員2 今更誰にも聞けなくて、もう何年も働いているのにね

………

作業員1 ………

二人、作業を続けている。

作業員2 ………(作業員1のことを横目で心配しているが、不

意に) 足元、いますよ。気をつけて。

作業員1 ………

作業員2 最近このくらいの時間によく見ますね。ははあ、今日

はいつもより少しはマシな格好をしている。いつもはね、首回り

も黒くてね、ああ、

作業員2、昇降機が動くゴウンゴウンという音が「いくぞいくぞ」

という人の声に聞こえてくる。

作業員2 聞こえますか？どうしましょう、来るみたいですよ。聞

こえますよね、いくぞつて。いくぞいくぞいくぞいくぞいくぞい
くぞいくぞいくぞいくぞ……

作業員1 ……

作業員2は、昇降機の音になりながらも美しいフォームで機
械物を上下に振っている。

作業員1は、しゃべることが出来ないのか、微笑みを浮かべたま
ま一言も喋らない。二人は並んだまま作業を続けている。

「3」英語を話すひろむす

松田家のリビング。

日曜日の夕方、窓から西日が入っている。

窓の側に置かれたプチトマトの苗木には、もう一つもトマトが身
をつけていない。

ひろむすは寝転んで羊皮紙に書かれた手紙を読んでいる。

ひろむす (小声で読んでる) at least... the earth is stopping.

玄関から音がして誰かが入ってくる音が聞こえる。

ひろむすは、手紙をジーンズのポケットに入れる。
スーパールのビニール袋を抱えた浩子がリビングに入ってくる。

浩子 ただいま。

ひろむす おかえり、

浩子 やだ、私が出た時から一ミリだって動いていないじゃ
ないの。

ひろむす ああ、今、

浩子 世の中の幸福が詰まっている。

ひろむす え？

浩子 そう言おうとしたんじゃないの？

ひろむす ……ああ、そうだよ。

浩子 なかなか、買いたいのものが揃わなくて。

ひろむす だんなご馳走が出てくる予定なんだい？

浩子 ネギ味噌よ。今、鯖江はいろんなものが品薄なのよ。

ひろむす そうか……

浩子 でも、いろんなことを思い出して欲しいのよ、あなたに。私
の料理、記憶が戻るかなって。

ひろむす うん。

浩子 人は記憶に障害があっても、嗅覚とか味覚の記憶っていう
のはなかなか消えるものじゃないって。中居先生も言った。

ひろむす 中居先生って、

浩子 私がいつもお世話になってる肺の先生。でね、あなた、一週

間前、あなたがうちの玄関に立っていた時、あなたトマト食べていたでしょう。

ひろむす ああ、そうだったね。

浩子 覚えてないかもしれないけど、あなたプチトマトがすごく、大好きだったのよ。

ひろむす うん。

浩子 それで、色々試して見てたわけ。

ひろむす うん。

浩子 思い出さないの？

ひろむす ごめん。

浩子 ……世の中の幸福が詰まっている、っていうのもあなたの口癖。覚えてた。

ひろむす いいや。まあ、あんまり分からない。

浩子 あなたが帰って来て、本当は、私、とんでもなく喜んだり泣いたりしてもいいはずなのに、そんなこと全然する気が起きないの。

ひろむす 口癖を忘れていたぐらいで大袈裟だな。

浩子 あの時のあなたは一体どこに消えてしまったのかな？

ひろむす どこだろう。はは……やっぱりよく覚えているよ、

僕は、君のそういうところが気に入っていたのさ。

浩子 (笑って) あなたのせいよ。

ひろむす そう？

浩子 これもあなたが教えてくれたんじゃないかしら。「あなたはどこに消えてしまったのか」

ひろむす ……

浩子 思い出してみよ。あなたは宇宙に本当に詳しい男だったのよ。宇宙が生まれた時は、みんな一つのエネルギーの塊だったから、どこかで嬉しいことが起これば、地球上、いいえ、宇宙状のどこかで、その嬉しいことが起きている。

ひろむす うん。

浩子 だからね。あなたが、幸福だって言うときは、その後は、必ず悲しい顔をするのね。この宇宙のどこかにいる、自分の幸福と引き換えに悲しんでいる誰かのことを想ってね。

ひろむす ……

日が落ちかけている。部屋の中は先ほどよりも暗い気がする。

浩子 ねえ、あなた。

ひろむす うん？

浩子 さっきポケットにしまったものを見せて。

ひろむす ……

浩子 ごめん、家に入る前に聞いちゃったの。あなたが、話しているところを。

ひろむす、部屋のカーテンを閉める。

ひろむす そうか。……………言う通り。記憶喪失というのは嘘だ。

浩子 ……………

ひろむす いや、これには訳があるんだ。

浩子 いいの、本当のことを教えてよ。

ひろむす ……………

浩子 一緒に行くために戻ってきたんじゃないの？

ひろむす ごめん。

浩子 どっちだっていいのよ。地面が動いていようと、天が動い

ていようと。

ひろむす 浩子、やめろよ。

浩子 私はただ、

ひろむす ……………

浩子 (うなづく)

ひろむす ……………

浩子 教えてよ、地面は動いているの、止まっているの？

日はさらに沈み、部屋は暗くなっていく。

〔4〕肺の診察を受ける浩子

中居循環器内科の診察室。

診察室の中に飾られていたのであろう、額縁に入った絵画は床に

立てかけられており、観葉植物も横に倒されている。

肺に持病がある浩子は定期的の中居医師の診察を受けている。

医師の中居の側には、看護師の吉見がいる。

吉見 動いているんですね。

中居、浩子の胸に手を当てたまま肺の音を聞いている。

中居 待ちなさい……………

吉見 それでは、止まっているのですか？

中居 ……………今聞いているから。

浩子 ……………

吉見 やはり、動いて……………

中居 吉見くん、ちょっと黙っていてくれるかな。

吉見 しかし、先生、そんな顔をして松田さんの胸を触っていて

は気になります。

中居 少し待ってくれないかな。

吉見 はつきりしてください。先生。

中居 吉見くん、極端なんだよ。動いているのか、止まっているの

かと二択しかないのでね。

吉見 当たり前ではないですか。選ぶことは概ね二択です。

中居 いいや、もっと曖昧なものなのだよ。内臓というのは実に

曖昧だ。二択にくることなどできないのさ。

吉見 そんなことはありませんよ。ねえ、松田さん。

浩子 え、あ、そうですね、そうかもしれない。

中居 吉見さん。世の中を二択にして面白くなくするのはやめてくれ。内臓と身体の外の世界は実に曖昧です。今、松田さんの杯の音を聞いています。しかし、良く考えて、肺は内臓ですか？……松田さん。

浩子 え？えーと、内臓。

中居 でしょう。内臓です。では、肺に繋がっている気管支は、喉は？松田さん。

浩子 内臓だと思います。

中居 しかし、口はどうですか。

浩子 口ですか……まあ、それは、

中居 口も内臓なんですよ。口は外に出ている内臓なんですよ。

吉見 先生、ちゃんと診療してください。

中居 (松田の胸に手を当てながら) 松田さんの声を肺を通して聞いているんです。ああ、響いているなあ……

吉見 ……

中居 なに、大丈夫です。

浩子 やっぱり、止まっているんでしょうか。

中居 ええ？イヤイヤ、大丈夫ですよ。動いています。通常ですよ。胸を触り続けたことは謝りますが……

松田 いえ、私の夫の話なんです。

中居 旦那さん止まっているんですか？

吉見 先生、(中居に耳打ちする) 松田さんの旦那さんは十年前に蒸発してらんですよ。

中居 あ……いや、なんだ、止まってませんよ、旦那さん。多分、動いていますよ、きつと、大いに……

浩子 それが止まっているって言うんです。

中居 松田さん？

浩子 先生。

中居 あ、はい。

浩子 これは私の妄想です。

中居 は？

浩子 夫が家と言うことなんですが、

吉見 松田さん、大丈夫ですか？

浩子 大丈夫です、ただの妄想ですから。

中居 松田さん、その夫というのは、どこにいらんですか。

浩子 家です。

吉見 先生……

中居 (吉見に) もしかして本当に帰って来たのかな……

吉見 (中居に) まさか、知らないんですか？松田さんの旦那さん、あの鯖工場の人に引き回しにされてこの街から逃げたんですよ。……死んでこそあれ、生きてこの街に戻ってくるなんてありえませんよ……

浩子 あと、これも私の妄想なんですが、

中居 はい。

吉見 はい。

浩子 やはり止まっているらしいのです、この地面は。

浩子の回想。

昨日の夜の二人の会話が行われる。

ひろむす 止まる、ということとは、どういうことだと思うかい。

浩子 止まるっていうのは、その、動いていないということでしょう。
よう。

ひろむす そうだけど、なんというか、何もしていないということとは違ってね。

浩子 でも、止まるってことは何もしていないってことでしょう。

ひろむす 能動的なことなんだよ。止まるっていうのはね。

浩子 よくわからないわ。

ひろむす 積極的に止まっているってことさ。

浩子 それって、

ひろむす なあ、浩子。やはり、止まっているんだよ。この地面は。

浩子 ああ………

ひろむす 十年前、僕は君を置いて、この街を去った。僕は心から信じていたのさ、だからあの時言ったんだ「それでも地球は止まってる」って。本当に心からそう思ったんだ。

浩子 じゃあどうして………

ひろむす でもその結果がどうだった？僕も確かに傷つけられた

が、君も傷ついた。僕が自分の意見を言えることは、そう、君の悲しみの上に立っていた。僕には、耐えられなかったんだ。

浩子 じゃあ、どうして、どうして、

ひろむす ごめん。

ひろむすはポケットの中から手紙を取り出す。

ひろむす アメリカにいたんだ。十年間。正確にはアメリカ人が乗っている船に十年間乗っていた。そこで確信を得た。やはりこの地面は止まっている。

浩子 やはりこの地面は止まっている。

中居 松田さん。

中居の声。

場所は中居循環器内科の診察室に戻る。

浩子 え？

中居 大丈夫ですか？

浩子 ああ、すみません………

中居 はい、大丈夫ですからね、安心してください。吉見さん、ちよっと、

吉見 はい。

中居 (小声で)松田さん、相当来てるな。えらくはっきりとした

幻覚、妄想をしている。

吉見 (小声で) 時間はかなり経っていますが、ショックなんですし

ようね……………

浩子 先生？

中居 鎮静剤を出しましょう。

中居、手元のメモに薬の名前を書きつけ、吉見に渡す。

浩子 先生、薬はいいです。妄想なので。

吉見 先生。

中居 興奮して話す、というのは肺に最もよくない行動ですから。

「ああ、少しいつもと違う、興奮している」と感じることはありません。ば、これを飲んでください。

浩子 だから、薬はいりません。

中居 じゃあ、ドライアイス出しときましょう。

浩子 え？

中居 ドライアイス。

浩子 なんて？

中居 ドライアイス。

中居、吉見に渡したメモを取り返して、「ドライアイス」と書き直す。

中居 受付で待っていてください。処方してもらいますからね。

浩子 ……量はたくさんですか？

中居 一箱分はありますけど、軽いですよ。

浩子 これから工場の方に顔を出すので、ちょっと、

中居 じゃあ、やっぱり鎮静剤にしておきましょうか。

浩子 どうしても？

中居 ええ、興奮して話す、というのは肺に最もよくない行動で

すから。「ああ、少しいつもと違う、興奮している」と感じることはありません。あれば、これを飲んでください。

浩子 飲む？

中居 いや、煙を吸い込んでください。

浩子 ……わかりました。

中居 手で直接接触すると火傷しますから、気をつけて。

浩子 はい、来週また来ます。

中居 ええ、お待ちしております。

浩子、病室を出て行く。

吉見 先生、大丈夫ですか？

中居 うん。

吉見 ドライアイスの煙なんて、かえって身体に悪いのでは？

中居 幻覚が見えるんだ。

吉見 ええ？

中居 なあに、ドライアイスは、正常な患者が吸えば確かに危険だよ。ただ、松田さんくらい強い幻覚を見ている人が吸うなら正
反対の効果を得られる。幻覚がなくなって、正常な判断ができる
のさ。

吉見 なるほど。

中居 しかし、「こべる」というのは難儀だね。

吉見 まあ、寄り合いのようなものですよ。私の彼氏もそこで働
いてて。あの工場のトラック運転手なんです。

中居 ああ、そうなんだ。え、じゃあ何、松田さんのことって昔か
ら知ってたの？

吉見 さあ、鈴木君と付き合ったのは最近のことだから……

中居は薬を準備するために奥の部屋に入って行く。

吉見 もう、興味ないんでしょ。

吉見、中居の後に続いて奥の部屋に入って行く。

「作業2 分離させる・仕分ける」

作業員3と作業員4が作業をしている。

作業員3の足元には、作業員2が美しいフォームで上下に振って
いた機械物が積まれている。

作業員3は積まれた機械物の一つを手にとると、機械物を二つに
分離させてしまう。力任せに壊してしまっただけではなく、二つに
別れた機械物を見ると、ちょうど果物の皮と実のように、自然の
摂理の一つのような具合で二つに別れていることが分かる。
作業員3はよく見ると右の腕から指先にかけてうまく動かすこ
とができないのか、器用に左手と足を使って作業をしている。
作業員4は、車椅子に乗っている。
作業員3が2つに分けた機械物を二つのカゴに仕分けている。
作業員4は牡牝鑑定士のような迷いのない手で素早く作業をし
ている。二人は作業をしながら、話をしている。

作業員3 そういえば、子どもが生まれるらしいよ。

作業員4 子ども？まさか。

作業員3 そうらしいね。

作業員4 本人から聞いたわけではないんでしょ？

作業員3 それはそうだけど、

作業員4 産むわけないだろう。

作業員3 わからないよ？

作業員4 わかるさ。

作業員3 そうかな。

二人は作業を続けている。

作業員3 ……しかし、どう思う？

作業員4 だから、嘘だろう、産まないよ、おろすのさ。

作業員3 子どもの話じゃなくて、

作業員4 え？

作業員3 2時間毎の休憩のチャイムさ、もう2時間経ってやし

ないか？

作業員4 ああ、そういえば……

作業員3 もうお昼にしたいな。

作業員4 あんまりお腹なんか空かないがね、

作業員3 僕だって、空腹なんかじゃない。しかし、休憩をとって

いると思わなければ、辛いのでね。

作業員4 それはそうだ、なあ、休むか。

作業員3 いや、チャイムを待とう。きつともうすぐ鳴ると思う

がね。

二人は滞りなく作業を続けている。

〔5〕ひろむす裁判再び

「こべる」の作業場。

以前部屋の中央に位置していた機械物の周辺には外壁がボロボロと剥がれ落ちている。

野村、谷田部、鈴木、金升が機械物を押ししている。

作業室のドアが開いて、ひろむすが入って来る。

ひろむす やあ。

谷田部 ああ、ああ、もう来ちゃったの。

ひろむす 浩子も後からやってくるよ。

谷田部 浩子さんも職場復帰だな。

鈴木 まあ、記憶障害っていうのもわからないくらいですね。

機械物の外壁がまた一部剥がれる。

野村 ああクソ、まただ。

ひろむす 落ちますね……

鈴木 なんです？

ひろむす ……ええ、この街の物はなんとというか、地面に落ち

ていきがちですね。

鈴木 それって、どういう意味ですか。

ひろむす いいえ、……家にあるトマトも全部落ちてしまいま

したしね。

谷田部 ははは、そうだ。あの時も落ちたな。

金升 あの時って？

谷田部 ああ、僕らが松田さんの家にお邪魔したときのことです

よ。ねえ？松田さん。

ひろむす ……………大きいですね。

谷田部 え？

ひろむす このなんというんですかね、丸い。

谷田部 ……………ああ、これは。

鈴木 ひろむすさん、忘れちゃったんですか？あれですよ。

浩子 あなた、

鈴木 押すんですよ、こう。

ひろむす ……………どれ、やってみよう。

谷田部 まさか。

野村 (谷田部に) いや、忘れてるんだ、このままにしよう。

ひろむす、機械物の前に立つ。

ひろむす これでいいのかい？

鈴木 ええ、で、そのまま押してみてください。

ひろむす ええ？一体何が起こるんだい。

鈴木 やってみますから、続いて。

金升 手伝います。

ひろむす、立ったまま機械物を押す四人を見ている。

ドライアイスが入った発泡スチロールボックスを持った浩子がやってくる。

ひろむす やあ、遅かったね。

浩子

鈴木 ねえ、松田さん、今度は二人してですか？

浩子 え？

鈴木 二人とも押ししてくれないじゃないですか。

浩子 ……………

ひろむす ……………

鈴木 聞いたんですよ。あなたが、妄想をしているとね。まあ、僕

の彼女は事情を知りませんから、本当に妄想だと思っていまし

たが、僕にはそんな風には思えませんでした。

ひろむす ……………鈴木くん。

野村 さあ、本当のことを知りたいだけなんだよ。ただ俺たちは

気味が悪くてね。あんな別れ方をしたのに、十年経って、こんな

風に再開したんだからね。

ひろむす ……………浩子さんは何も知らないんだ。

浩子 ……………

野村 じゃあ、

「作業3 運ぶ・くつつける」

作業員4が仕分けた機械物が入ったカゴを運ぶ作業員5。

作業員5は視力が弱く、注意深く歩いている。

作業員6は、作業員5が近くに来ると、肩を叩いて位置を知らせ

る。作業員6は一度分離された機械物をくつつける作業をしている。出来上がった機械物を「こべる」の作業場にある機械物に作業員6が入れる。そうすると、昇降機の小さな入り口が開き、作業員1が作業を始める。いつの間にか、作業員1〜6が一連の作業を行なっている。

2時間毎のチャイムはまだ鳴らない。

「6」「こべる」の作業場。

野村　じゃあ、一緒に押そうじゃないか。

ひろむす　それは……………

金升　どうなんですか、松田さん。

ひろむす　まあ待て、話そうじゃないか。十年前のことはもう俺

はいい。俺も悪かった。けど聞いてくれ、この十年間、俺はアメ

リカ人が操縦する船に十年間乗っていた。

野村　それがなんだっていうんだ。

ひろむす　待て、俺がのっていたのは十年間丸々なんだ。

谷田部　……………

ひろむす　船の名前は「マイフライヤー号」。この船は最初の五年間

北北西にひたすら進んだ。彼らは、地が永遠の平地であることを

証明しようと立ち上がった冒険者だった。

野村　……………

ひろむす　五年間ひたすら進んだんだ。ところが、一向に地球を

一周することができない。僕たちは大地の永遠の平たさを信じて進んでいたが、途中で気がついた。

野村　……………

ひろむす　（耐えられなくなって）ああ！みんな、どうしてなん

だ、十年前はこんなことなかったじゃないか！

野村　十年前は悪かったさ。

ひろむす　じゃあ、

野村　一緒に押すことはできないんだろ。

ひろむす　……………そうです。

野村　なあ、お前には仕事を用意したよ。

ひろむす　僕はここでもう働く気はないんです。

野村　仕事と言っても、工場にある一角をお前に与えるだけさ。

ひろむす　ここで仕事はしません！

谷田部　俺たちはお前を認めることはできないけど。お前の持ち

場の中にいるなら、どんな主張しても俺たちは邪魔しないよ。

金升　みんなで話したんです。

鈴木　その代わり、部屋の中にいてくれさえすればいいですから。

ひろむす　ちよつと待ってくれ、俺が言いたいのは、

野村　ああ、いいよ、言ってくれれば、ただ、お前の持ち場と言っ

てくれて言ってるんだ。

機械物を押す力が徐々に強くなっていく。

興奮しているひろむす

ひろむす どうして！

浩子 やめて！落ち着いて！

野村 ……

浩子 (何かに気が付いて) ああ、そうよ！

浩子、中居循環器内科で渡された、ドライアイスの箱の蓋を開けてひろむすに煙を送る。

浩子 ちょっと冷静になってよ！

ひろむす (浩子の言葉に気がつかない) だけど、途中で気がついたんだ！

次第に「こべる」の作業場がマイフレーザー号の船内になってくる。キャプテンマイヤーと船員のジョンソルが出てくる。

野村 なんだ！

谷田部 アメリカ人だ！

マイヤー おい！ジョンソル、ひろむす、今日で出港してからまる五年が経った、これは、この地が平らであることの一つの証明だ！

ジョンソル ああマイヤー！本当にそうだ！ひろむす、もっと喜ばないか。

ひろむす ちょっと待て、みんな、本当にこのまま大地が永遠に平らであれば、どうやって、俺たちのことを追い出した奴らに証明することができるんだ？

マイヤー ひろむす！

ジョンソル ひろむす！

ひろむす そうして僕らは戻ったんだ。五年かけて進んだ道を五年かけて戻った、彼らはアメリカへ、僕は鯖江町へ……

鈴木 (マイヤーに向かって) 近寄るな！

浩子 おかしい！おかしい！みんな、落ち着いて！

ひろむす (ポケットの手紙を出して) これは航海日記の一部だ！見てくれ！

幻覚の船は嵐で揺れ始める。

ジョンソルとマイヤーも波に揺れている。

野村 うわ！！

谷田部 ああ！船が！

鈴木 まずい、このままでは！

騒がしかった音が静かになっていくまでの時間は、長いようにも感じるが、あつという間に、

もしくは意識が突然飛んでしまうかのように切れる。

〔7〕中居循環器内科

中居循環器内科の診察室。

中居と浩子が向かい合っている。

中居 それで、海は大荒れで、火事の中船は沈んで大騒ぎ、

浩子 はい。

中居 ……とはならなかったわけですね。

浩子 はい。

中居 そうですか……

浩子 先生のおかげです。みんな落ち着きを取り戻して、

中居 それは……

中居、身震いする。

浩子 大丈夫ですか？

中居 大丈夫……いえ、怖いんですよ。

浩子 怖い？

中居 ええ……なんせ、誰も幻覚をみてくれてないものですか

ら……

浩子 (笑って)先生、だから、誰も幻覚なんて見てないんですよ、

それでいいんですよ？

中居 ええ、それはそうですが……

浩子 じゃあ、もう行きますね。

中居 え、どこに行くんです？まだ診察は、

浩子 午後から職場に復帰するんです。

中居 え？

浩子 やはり、夫がいないと働けないと思いました。私。今までど

うしても仕事に抵抗がありました。夫のように働いていない
人が家の中にいると、働かなければと言う気持ちになりますね。

中居 ……

浩子 先生にはそれはもうお世話になりましたので、ご挨拶にこ

うようと思ひまして、これ良かったら皆さんで召し上がってくだ

さい。

浩子、中居にうなぎパイを手渡す。

中居 ああ……それはどうもご丁寧にありがとうございます。

浩子 それでは、

浩子、診察室を出て行く。

しばらくして吉見が診察室に入ってくる。

中居 なんだ、隠れてたのか。

吉見 そうじゃありません。

中居 あ、そう？

吉見 この街も変わりましたよ。

中居 代わり映えしないよ。

吉見 松田さんの旦那さんみたいな人は、

中居 うん、

吉見 少し前までは、いろんな罰といたうのがありましたからね、

中居 そう。

吉見 右足引っ掛け馬あり市中引き摺り回しに比べたら、ましですよ。

中居 右足引っ掛け？

吉見 先生自身はどう思うんです？

中居 何が。

吉見 地球の話ですよ。動いているのか、止まっているのか。

中居 そうだね……………

中居、診察室の床に倒れている様々なものを眺めている。

中居 止まっているのかな。

吉見 よかった、私もそう思います。

中居 あ、なんだ、そうだったんだ。

中居、吉見、笑い合う。

吉見 松田さん、次の診察はいつ来られるんですか？

中居 もう来ないよ。

吉見 え？そうなんですか。

中居 ああ……………もう工場に復帰したからね。

診察室の外から何かが落ちる音が聞こえる。

吉見 そうですか、

診察の外からまた、何かが落ちる音が聞こえる。

二人はそのまま話を続けている。

〔8〕エピローグ

診察室の外では、作業員たちによる労働が続いている。

昇降口のゴウンゴウンという音。

機械物を上下に降る音。

機械物を割る音。

カゴの中に投げ入れた音。

そのカゴを運ぶ足音。

機械物をくつつける音。

それらの工場の音の中に時折、どこかで何かが落ちた音が聞こえる。

作業員1〜6はそれぞれの作業を美しく、無駄のない動作でこな

している。手の中にある機械物は形を変えながら、その本体は変わることもなく場所を淡々と移動している。

「こべる」の作業室では、野村たち「こべる」のメンバーが機械物を押している。

浩子は、機械物を押す野村たちに合流して、機械物を押す。

工場で働く多くの作業員の仕事はバラバラのように見えて、その動線や手の動きには無駄がなく、狂いがないように思える。

「こべる」のメンバーが押している機械物を中心に、環状に作業者が配置されている。

ひろむすが工場の中を歩いている。

ひろむすの姿は他の作業員の目には入らない。

美しい作業風景と対照的に歩いているひろむすは、

作業場を歩いている途中、その場に座り込み、

ポケットの中から羊皮紙の手紙を取り出し、その手紙を枕にして横に寝そべり、目を閉じる。

横になり、目を閉じたひろむすは死んでいるようにも、生きていけるようにも見える。

2時間毎に流れる休憩のチャイムが鳴る。

工場音が止む。

動作をやめた静けさに場が包まれる。

おわり